



藤巻 光加 (ふじまき みつか)

山梨県出身。大学進学を機に上京し、そのまま東京で就職。平成23年会社を退職し、夫婦で上島町に移住。島おこし協力隊として活動中。今年の9月末で任期満了となるが、そのまま島に定住し、農業を柱としながら生活予定。

## 「あるあるメガネ」でみれば、 宝の山がみえてくる



子どもアートキャンプ「かわそキャンプ」の活動。

### ◆「暮らし」が中心にある生き方をしたい

上島町は、愛媛県の東北部、広島県境に位置し、瀬戸内海の穏やかな海に囲まれた人口約七四〇〇人、七つの有人島と一八の無人島からなる町です。私は、主に弓削<sup>ゆげ</sup>・生名<sup>いきな</sup>地区で活動を行なっています。

協力隊になる前は、東京でマーケティングリサーチの仕事をしていました。つぎつぎと開発される商品やサービス、技術、販売戦略に触れることができ、仕事はやりがいのあるものでした。しかし、落ちついて食事をとる時間もなく、終電や徹夜はあたりまえという生活にやがて疑問を覚えるようになりました。生きるために働いているはずなのに、働くことだけが生きることになってしまっている。そんな風を感じるようになり、自然に寄り添って「暮らす」ということを大切にしたいと思うようになりました。

しかし、その思いはあっても、実際に行動に移すまでには至っていませんでした。そんな中、インターネットで、地域おこし協力隊のことを知りました。移住時の悩みのある住まいと仕事を提供していただけること、そして、自分がこれまで培ってきた経験を、地域というフィールドで活かせるのではないかと思ひ、興味を持ちました。東日本大震災があったことも、決断の後押しになりました。

上島町に興味をもったのは、瀬戸内海の島への憧れや漠

然としたイメージからでしたが、さまざまなタイミングや縁に恵まれ、平成二十三年一〇月より協力隊としての活動を開始することになりました。

◆「ないないメガネ」を捨て「あるあるメガネ」をかける

上島町の場合、協力隊からの提案が活動のメインとなっており、担当課の協力を得ながら、さまざまな企画を実施してきました。個々の活動には、それぞれ意図と目的があります。いづれにおいても「小さな町だからこそできること、島だからこそできること」を大切にしたいというのが、活動の根っこにあります。

小さな町だから、子どもがいない、お店がない、後継者がいない、楽しみがない、仕事がない。「ないないメガネ」で地域を見ると、ネガティブなことばかりが目につきます。とくに、「栄えていた時期」を知る方からすると、いまの島の様子は寂しいということになります。けれども、人口減少、少子高齢化は避けられない事実です。平成三十二年には、上島町の人口は六〇〇〇人を割り、高齢化率は四八パーセントになると推計されています（国立社会保障人口問題研究所）。

そうした社会構造の変化は、さまざまな弊害を生みだします。産業も文化も地域コミュニティも、いまままでおなじょうに維持することは難しくなっています。「ないない

メガネ」をかけていたら、地域は廃れてみえるばかり。けれども、そうした変化によって生まれた「空白」や「余白」にこそ、私は魅力を感じるのです。

大切なことは、その「空白」や「余白」を自分たちが活かせるかどうかだと思います。小さな町だからこそ、子どもが少ない分、手厚い教育支援ができるし、お店がないならつくることができる。耕作放棄地で新しい作物をつくることもできるし、空き家をリノベーションして新しい事業もできる。「余白」は、新しいものが生まれる「余地」。大きなものに頼るのではなく、自分たちの暮らしを、自分たちでデザインできるといふ余地です。好奇心と実行力があれば、「小さい」ということが、創造性に富んだ最高の環境になりえるのです。

さらに島が素晴らしいのは、豊かな自然とその自然の恩恵を活かす知恵を有していることです。

資源が限られているからこそ、島の先人たちはさまざまな工夫をして、この地で豊かに、誇りを持って暮らしてきました。海から山から野から。



上島町は、平成16年に魚島村・生名村・岩城村・弓削町の離島4町村が合併して生まれた。



自閉症児のアート作品。

みれば、まさに宝の島になるのです。  
景気のいい時代を知らないで育った私たち世代にとって  
は、「ないこと」の方があたりまえです。何かが「繁栄」  
していたという記憶や経験は、年配の方よりも少ないので  
す。しかし、同時に必要なものはすべてあるという、飽和  
の時代で育ってきたという側面もあります。だからこそ私  
は、島に生まれた「空白」や「余白」に魅力を感じるのか  
もしれません。それは、東京にいる時には感じられなかつ  
たものです。

ないものは買うのでは  
なく、つくる。季節に  
あった仕事をし、季節  
のものをいただく。そ  
の豊かな環境と知恵こ  
そが、島の最も大切な  
地域資源だと思ってい  
ます。新しいものも、  
すべてこの資源がある  
からこそ可能になりま  
す。コンパクトなこの  
島の中に、必要なこと  
はすべてある。「ある  
あるメガネ」で地域を

## ◆島づくりのための取り組み

インタビュ誌の発行、読書ス  
ペースの設置、子どもアートキャ  
ンプ、東京での食イベント、青空  
市、自閉症の子どもたちのアート  
作品展、中学校の文化部活動のサ  
ポートなど、さまざまなことに取  
り組ませていただけてきました。

これらの取り組みの始まりは、す  
べて「人」です。自分がしたいか  
らというよりは、人に会うことで  
すべきことが生まれ、広がっていったというのが、私の活  
動の特徴だと思います。これもまた、小さな町だからこそ  
可能な形かもしれません。とくに、それまであまり光があ  
たつてこなかった分野での活動にやりがいを感じています。

ここでは、具体的なプロジェクトを二つご紹介させてい  
ただきます。

### ◆事例① 人と人、島と都市をつなぐ読みもの

#### 『Small Story』

『Small Story』は、地域で活躍されている「人」に光を  
あて、毎号一名の方にお話をうかがってつくるインタビュ



かわうそキャンプでつくった椅子。

誌です。ウェブマガジンとして、島おこし協力隊のフェイスブックページやブログで配信するほか、町内の各公共施設や飲食店に紙媒体も設置しています。地域に根ざした福祉サービスを提供するNPO、人口約三〇名の島で高齢者の見守りを行う集落支援員、布絵本制作などのバリアフリーな子育てを応援している方など、地域のために積極的に活動されている方にお話をうかがい、これまでに七号発行してきました。

大切にしたいのは、活動の根っこにある想いや夢です。なぜ、その活動をするのかという部分に光をあて、取材・編集し、町内外に向けて発信しています。人の魅力は、町の魅力になります。急激に目に見える変化がでるものではありませんが、共感してくださる読者の方からメールをいただくこともあり、少しずつですが何か伝えることができているのではないかと思っています。

### ◆事例② 手しごとの魅力を発信

#### 「かみじま てしごと市」

地域には、さまざまなものづくりをされている方がいらっしやいます。畑仕事に精を出すお父さん、料理上手のお母さん、お菓子づくりや手芸が好きな中学生、プロの陶芸家まで。大量生産・大量消費ではなく、知っている人がつくったものに囲まれて暮らせることは、とても心地よいこ



生名橋からみた戸削島の風景。

とです。そんな手づくり、手しごとの魅力をほんわかした雰囲気の中で、共有する場をつくりたいと思い、企画したのが、この「てしごと市」です。春・夏・秋と年三回実施し、この夏で四回目を迎えます。徐々に島の中での認知度も上がってきているように感じています。

「出展のルールは、「自分でつくったものであること」。委託販売はお断りしています。とくに、地域の中高生や子育て中のお母さんなどの出展を応援しています。自分の好きなことで輝ける場を島の中につくることで、もっと島を好きになってほしいという意図があります。」

### ◆宝探しは続く

協力隊になったばかりの頃、島おこしや島づくりとは何なのだろうと悩んだこともありました。いまでも、自分が

## 受け入れ側からみた隊員の活動

### ●島の現状

上島町は、半径200kmで神戸市と下関市を結ぶ瀬戸内海のほぼ中央に位置し、愛媛県の東北部、広島県境に浮かぶ7つの有人島と18の無人島で構成する全域離島の町です。

現在、本町においては、人口減少による過疎化や高齢化などの進行を食い止めることが喫緊の課題となっています。しかし、全国のどこの自治体でも同様の問題を抱えている昨今、突出した取り組みでもしない限り、そう簡単に若者を田舎に呼び寄せ、地域を活性化させ、人口減少に歯止めをかけるなど理想論に過ぎず、夢のまた夢といった状況です。それでも「何もしないことには変わりようもない」ということで、総務省の地域おこし協力隊制度を活用し、「とにかくものは試し」で協力隊員の募集から採用へ至ったというのが本音ではないでしょうか。

### ●隊員の活躍

採用当初の協力隊員たちは、田舎で暮らす地元住民からみればやはり「よそ者」という見方や意識が強く、最初は何をするにしても住民との協力体制などに苦労したようです。しかし、地域行事に参加したり、企画イベントを行うことで徐々に住民の認知度も高まり、いまではすっかり島人（地元人）になっています。先に紹介した藤巻さんは、限界集落となっている高井神島での「かわろそキャンプ」や身体にやさしく手づくりにごだわった「かみじま てしごと市」、また、自閉症の子どもたちが描いた作品展にあわせて、知的障害・身体障害に関する講演会の実施など、多種多様なイベントを企画・実行してきました。

私が毎回参加している「かみじま てしごと市」に関していえば、町内はもちろん県外もふくむ近隣で「てしごと」をさせている方々が集い、いまではすっかり島人を出品者を展覧しています。イベント会場は、町内外の出展者と来場客との交流促進の場となっており、出展者や来客数は、回数を重ねるごとに増加の一途を辿っています。日頃このようなイベントがなかった田舎の人々にとって、定期的に行われる楽しみな催しのひとつとなっているようです。

このような活動を通して、地元住民に認知され、任期終了後も定住することに決めた藤巻隊員は、何十年も使用されてなかった築100年という古い空き家を改修し、住居を構えるまでに至っております。現在は、任期満了後に営業しようと目論んでいる「農家レストラン兼カフェ」の実現に向け、日々勉強や準備をしている真っ最中です。

### ●これからへ向けて

任期満了となると、いままでも出勤していた町役場から離れてしまうため、職員との協力体制も限られてくるとは思いますが、これからでもできる限り活動の手助けをしていきたいと考えています。

自分の故郷でもない地域に移住し、その島で一生を過ごそうと決心することは、私たち地元住民にとっては、想像もつかないぐらい大変なことだと思います。協力隊として3年間、島のために過ごして、任期満了後も上島町へ定住すると決心していたのだ協力隊員に感謝するとともに、今後は移住者の代表として、新たな移住者と自治体とのよき橋渡し役としての活躍に期待し、今後も互いに協力しながら、さらなる地域の活性化に取り組んでいきたいと考えています。

(愛媛県上島町総務部企画政策課 坂上将人)

していることが正しいのか、迷うことがよくあります。地域おこしに正解はないとよく言われますが、それは手法がおなじでも、地域や関わる人が変われば、まったく別の結果を生むからなのではないかと思えます。私という人間がたまたまこの島に来て、そこで出会った方とたまたま何かをして、何かが生まれたり、生まれなかつたりする。その偶然性がこの仕事の魅力だと、いまあらためて思います。

私にとつての島づくりは、自分自身もふくめ、島の人がちが島で暮らすことに誇りを持ち、島を「あるあるメガネ」で見続けられるようにすることです。小さな町、島だからこそその可能性を積極的に見出し、先人たちが残してくれた自然と知恵を後世に伝えていくこと。そんなことを大切にしながら、残りの任期、そして任期後も島に根づいていきたいと思っています。